『今、わたしの心は』（ヨハネの福音書 12 章 27-36 節）2024.1.14.

＜はじめに＞ 年頭から相次ぐニュースに私たちの心は揺さぶられています。このタイミングで？どうして？どうなるの？という疑問が去来します。神を信じる者ならどんなときにも泰然自若で、心騒ぐことなどはない、と言えるでしょうか。この箇所で、イエスも「心が騒ぐ」(27)と言われています。

Ⅰ　この時に至った(27-28)

①今、この時に(27)

ギリシア人の申し出(21)を契機に、イエスは神の計画が実現する時を察知されます(23)。自身の死によってすべての人が罪から救われて永遠のいのちに至る道が開かれる時です(24-25)。しかし、イエスの心は騒いでいます。二つの願いが交錯しているからです。

②二つの願い

自身の死から逃れたい、という人として自然な願いと、それさえ甘受して神の計画に沿い、神の栄光を現したいという願いです。ゲッセマネの祈りと同じです(マタイ 26:39)。イエスはこれまで同様、神の計画を選び取ります。天からの声もそれに応答します(28)。

③時を受け取る(27)

イエスは「このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ」(27)と自らを傾けられます。私たちの存在と時の流れは、全て神の計画の中にあります(詩 31:15)。私たちはそこに目を向け、時と状況を支配されている神に信頼しているでしょうか(詩 57:7, インマヌエル 565-2 節)。

Ⅱ　上げられるとき(30-34)

①十字架での死(31-32)

31 節でイエスは重ねて「今」を意識されています。それは自ら「地上から上げられるとき」(32)で、すべての人を自分のもとに引き寄せることに繋がる、と告げます。「上げられる」は本書の 3:14,8:28,12:32,34 に出て来て、いずれもイエスの十字架上での死を表します。

②二重の意味

律法は「木にかけられた者は神にのろわれた者」(申命 21:23)と言い、イエスに期待する群衆は、その言葉に戸惑います(34)。イエスは罪ののろいを一身に背負われるために、十字架に上げられます(33)。しかし、神はイエスを高く上げられたのです(ピリピ 2:9)。

③不思議な道(詩篇 118:22-23)

強い力をもって支配者を追い出し、占領されている人々を解放するさまは、この世に満ちています。しかし、神は御子イエスのいのちを代償に解放する計画です。これがイエスの心さえ揺さぶり(27)、人々には理解し難いこと(34)ですが、神のみ可能な栄光の道です。

Ⅲ　心騒ぐときに

①心騒ぐイエス(27、11:33、13:21)

ヨハネの福音書にはイエスが心を騒がせている記述が 27 節と 11:33、13:21 にもあります。その場面・背景を見て、何にイエスの心が騒いでいるのか、イエスの思いを探ってみてください。そのイエスが 14:1,27 では、弟子たちに「心を騒がせるな」と命じています。

②人となられた神

神の子・救い主なら、どんなときにも泰然自若であるべきでしょうか。しかし、現にイエスは「心が騒ぐ」と言われています。この御方は神でありながら、私たちと同じ肉体と感情・感覚を持つ人間です。ですから、動揺する私たちに同情できる御方です(ヘブル 4:15)。

③心を騒がせるな(14:1, 27)

イエスの葛藤は、自身の十字架での死によって、人を罪から救う神の計画が実現する故です。この葛藤を越えて神の栄光へと進まれたイエスを信じること(14:1)で、私たちにも平安が与えられます(14:27)。自分に負えない不可解も、主に信頼して委ねる道があります。

＜おわりに＞ すべてに説明と納得を伴う道を求めるなら、私たちの心は騒ぎ、落ち着きません。しかしイエスは神の時と計画に沿う生き方を私たちに示しておられます。そして、イエスを信じ委ねる者を平安で包まれます。神には方法があり、道を造られ、私たちを導かれます。(H.M.)